

魔笛

2007(平成19)年5月29日鑑賞(東宝試写室)

★★★★★



監督・脚本＝ケネス・ブラナー／音楽＝ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト／リブレット(脚色)＝スティーヴン・フライ／音楽監督・指揮＝ジェイムズ・コンロン／出演＝ルネ・バーベ／リュウボフ・ペトロヴァ／ジョセフ・カイザー／エイミー・カーソン／ベン・デイヴィス／シルヴィア・モイ／トム・ランドル／テウタ・コッコ／ルイズ・カリナン／キム＝マリー・ウッドハウス(東芝エンタテインメント配給／2006年イギリス映画／139分)

……ミュージカル映画大好き人間の私にとって、ケネス・ブラナーが監督したこのオペラ映画は必見。そして期待以上の出来に大感激！ まずビックリするのは、オリジナル版のストーリーをそのままに、舞台を第一次世界大戦の塹壕戦に移したこと。そのため、「光と闇の抗争」という本来のテーマが、さらに「戦争と平和」という大テーマに通じることに……。魔術師のようなケネス・ブラナーの手腕に感心しながら、これを機会としてあなたも、ストーリーでも楽曲面でも、『魔笛』博士を目指してみれば……？

ミュージカル映画大好き人間の私には……

2001年11月20日に観たニコール・キッドマン主演の『ムーラン・ルージュ』(01年)も良かったし、2006年3月29日に観た『RENT／レント』(05年)も良かった。また、2003年2月13日に観た『シカゴ』(02年)も良かったが、最近観たミュージカル映画で大感激したのは2005年2月12日に観た『オペラ座の怪人』(04年)と2007年2月17日に観た『ドリームガールズ』(06年)。

アメリカ、イギリスと違って日本では、ミュージカル鑑賞はかなり前からチケットを予約しておかなければならない一大イベントになることが多いから大変だし、料金も1万円前後と高いのが相場。それに比べるとミュージカル映画は、約2時間にまとめられているうえ、料金も安く、思いついたらすぐに観ることができるから気楽。またミュージカル鑑賞の場合は、座席の位置によって舞台の見やすさが大きく左右され

るが、映画は多少席が左右にズレていてもスクリーンは最適の状態を提供してくれるし、音響効果も抜群だから、かえって劇場よりも快適な面も……。

そんなミュージカル映画大好き人間の私だから、モーツァルトの歌劇『魔笛』が「オペラ映画」として登場するとあっては、絶対に見逃すワケにはいかないもの。プレスシートの中にある「『オペラ映画』の歴史」を読むと、過去「オペラ映画」はたくさんあったようだが、私はそれらを全然観ていないことに啞然……。そこではモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』（79年）やシェーンベルクのオペラを映画化した『モーゼとアロン』（75年）、『今日から明日へ』（97年）等を注目すべきと書かれてあるので、いずれ機会があれば鑑賞したいもの。

この解説の中に書かれている作品で私が唯一観たのが、『永遠のマリア・カラス』（02年）だけというのは少しさびしい限りだが、所詮それが私の映画力の総体。それを率直に認めたうえで、これから頑張っていかなければ……。

こんな機会でなくっちゃ……

私は大学時代から修習生そして弁護士登録後4、5年の間は、クラシックのLPレコードをよく購入して聴いていたが、それでも歌劇・オペラまでは深入りしなかった。それはその世界に入れば楽しいし、奥が深いことはわかっているけど、社会派弁護士としての活動に忙しい（？）私としては、そこまで入ってしまうとヤバイという自制心が働いていたため……？

ワーグナーの『ニューベルングの指環』や『トリスタンとイゾルデ』などの超大作にハマれば大変で、そうなれば次は「ザルツブルク音楽祭」に行ってみたいとなることは確実。また、モーツァルトの歌劇『ドン・ジョヴァンニ』や『フィガロの結婚』そして『魔笛』をLPレコードで聴くだけであれば大した時間はとらないものの、オペラはやはり聴くだけでは物足りないもので、実物を劇場で観たくなるのが当然。そしてそうなれば、かなりの事前準備が必要なものも明らか。

それに比べれば、オペラ映画を観るのはさきわめて簡単。こんな機会でなくちゃモーツァルトの『魔笛』を完全鑑賞することはできないと思ったが、それは大正解！

ケネス・ブラナーに注目！

私がケネス・ブラナーに注目し始めたのは、1996年に映画化された『ハムレット』

を観た時から。4時間を超える超大作のこの映画は満席だったため、かなり前方でしかも端っこの席で鑑賞せざるをえなかったが、そのスケールの大きさとシェイクスピア劇の重厚さにビックリさせられたもの。しかも彼は1960年生まれだから、この時まだ36歳という若さで監督・脚本・主演を果たしていたのだから驚き。

23歳でロイヤル・シェイクスピア・カンパニーに参加し、『ヘンリー五世』『ロミオとジュリエット』への主演をはじめ、シェイクスピア劇の申し子のような彼が、何と今度はモーツァルトのオペラ『魔笛』のオペラ映画を企画したというのだから、そりゃ見逃すわけにはいかないもの。ロバート・アルトマン監督の『相続人』(97年)における俳優としての出来はまずまずだったことを考えると、やはり彼には監督としての才能をトコトン発揮してもらった方がいいのでは……？

そんなケネス・ブラナーが監督・脚本したモーツァルトの『魔笛』は、何とその舞台が第一次世界大戦のヨーロッパにおける塹壕戦。第一次世界大戦は1914年に始まったが、モーツァルトが35歳の若さで死亡したのは1791年、つまり『魔笛』を最後の歌劇として作曲したその年だ。すると、天才モーツァルトは第一次世界大戦を予測していたの……？ いや、そんなバカなことはありえない。すると……？

「戦場のモーツァルト」とは……？

第一次世界大戦を描いた不朽の名作はレマルクの『西部戦線異状なし』。この小説が描いた西部戦線における塹壕戦の悲惨さは、その後さまざまな作品のモチーフとなっている。『戦場のピアニスト』(02年)もそうだし、私が見逃した名作『戦場のアリア』(05年)もそう。しかして、この映画は「戦場のモーツァルト」……？

この映画のプレスシートには、前島秀国氏の「ケネス・ブラナーの『魔笛』——“戦場のモーツァルト”——という興味深い解説がある。映画の冒頭約3分間の『魔笛』序曲の中に登場するシーンは美しく広がる緑の平野だが、何とそこには長々と続くヨーロッパ戦線における塹壕が……。前島秀国氏の解説によるとそれは、『西部戦線異状なし』や『影武者』や『チャップリンの独裁者』といった無数の“戦争映画の記憶”なのだ」とのこと。さらに、モーツァルトの『魔笛』がもつ「多義性」を前提として、ケネス・ブラナーが戦争をテーマとして『魔笛』を映像化する決意をしたと解説している。また第二幕の冒頭に登場する共同墓地の場面において、アラビア語、英語、日本語で戦死者たちの名前が刻まれていることを取り上げて、ケネス・ブラナーの意図

を解説している。

この解説をどう読み解くかは人それぞれだが、大蛇に襲われる王子の物語から始まるモーツァルトの『魔笛』を、第一次世界大戦の舞台に移し、大蛇を毒ガスに、王子を兵士に切り替えるという大胆な発想はまさに天才ケネス・ブラナーならではのもの。そしてそれを、前島秀国氏が「戦場のモーツァルト」と題して解説したのは、まさに慧眼！

『アマデウス』のすばらしさを再認識！

1985年のアカデミー賞作品賞をはじめ8部門を受賞したのが、天才ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトを、彼と同時代に生きたアントニオ・サリエリの独白と回想の中で描いた『アマデウス』。これはストーリーもユニークだったし、映画全編に流れるモーツァルトの音楽のすばらしさも絶品！交響曲や管弦楽曲そしてピアノ曲やバイオリン曲さらにモーツァルトの最期の場面で流れる重厚な『レクイエム』もすばらしかったが、『フィガロの結婚』『ドン・ジョヴァンニ』『魔笛』などのオペラの名場面がスクリーン上に映し出されると、それだけで大興奮したもの。

といっても、これらのモーツァルトのオペラを全編きちんと鑑賞したことのある人は少ないはず。あの『アマデウス』のあのワンシーンに登場したあの『魔笛』の全歌曲を、この映画で聴くことができたのはホントにいい経験だったが、そこであらためて再認識させられたのが、『アマデウス』のすばらしさ。だって、膨大な量のモーツァルトの名曲をすべて聴くことは大変なところ、『アマデウス』を観ることによって、モーツァルト音楽のエッセンスを要領よくつまみ食いしながら、感動することができたのだから……。

『魔笛』鑑賞の視点 その1——タミーノとパミーナの恋は……？

多分私と同じように、モーツァルトと『魔笛』の名前は知っていても、そのストーリー全編を知っている人や全21曲からなる楽曲をすべて聴いたことのある人は少ないと思うので、以下いくつか、私なりの「『魔笛』鑑賞の視点」を提示したい。

その第1は、ラブストーリーとしての兵士（オリジナルでは王子）タミーノ（ジョセフ・カイザー）と夜の女王の娘パミーナ（エイミー・カーソン）との恋の行方。タミーノは夜の女王（リューブフ・ペトロヴァ）から、暗黒卿ザラストロ（ルネ・パー



© THE PETER MOORES FOUNDATION-2006

ぺ)にパミーナを奪われたとして、その救出を頼まれたことによってパミーナと恋に落ちるわけだが、『魔笛』のストーリーは結構複雑で波瀾万丈。そうすんなりと2人の恋は成就できないようになっている。

お邪魔虫の第1は、ザラストロの部下である肌の黒いモノスタトス(トム・ランドル)の登場。そしてお邪魔虫(?)の第2は、ある目的のためにザラストロからタミーノに課せられる試練。その試練の第1は、沈黙の試練。夫婦でも恋人でも、対話がなくなればその絆が失われていくのは当然で、タミーノがその試練に耐えれば耐えるほど、パミーナはタミーノから離れていくことに……? さらに第2、第3の試練は、火の試練と水の試練。

そんな、18世紀末の歌劇とも思えないようなドラマティックな試練を乗り越えて、タミーノとパミーナの恋は無事成就するのだろうか……?

🎬 『魔笛』鑑賞の視点 その2——魔法の笛と魔法の鈴

日本人は横溝正史の『悪魔が来りて笛を吹く』という小説や映画をよく知っている。また日本人は「魔」という漢字から瞬間的に悪魔を連想し、不吉なイメージをもつはず……?

しかし、モーツァルトの『魔笛』の魔は、悪魔の魔ではなく、魔法の魔。つまり、ファンタジー色の強い物語の影の主演(?)として登場するのが、夜の女王からタミーノにプレゼントされた魔法の笛(Magic Flute、マジック・フルート)で、それがこの歌劇のタイトルになっているわけだ。

他方、タミーノの相棒(?)となるパパゲーノ(ベン・デイヴィス)が持つのが魔法の鈴。人間も小道具も1人だけ、1つだけでは、物語に深みを与えることができないもの……? それを前提として、魔法の笛の果たす役割と、魔法の鈴の果たす役割に注目を……。

『魔笛』鑑賞の視点 その3——善玉 vs. 悪玉、ザラストロ vs. 夜の女王

水戸黄門をはじめとするいわゆる「勧善懲悪」モノの物語は、いつの時代でも絶対的な人気を得ているが、実はホントの世の中はそれほど単純ではない。つまり、何が善で何が悪か、誰が善玉で誰が悪玉かは、それほど明らかではないもの……? 若い時からヨーロッパ中を旅して回ったモーツァルトには、そんな物事の本質や人間の本質が見えていたのかも……? そのため、彼の最後の歌劇『魔笛』では、第一幕と第二幕で善玉と悪玉を逆転させるという大胆な演出を……。

第一幕の冒頭、毒ガスにやられた(オリジナル版では大蛇にやられた)タミーノを助けた3人の従軍看護婦(テウタ・コッコ、ルイズ・カリナン、キム＝マリー・ウッドハウス)は、実は夜の女王に仕える侍女。そして夜の女王は、暗黒卿ザラストロに奪われた娘パミーナの救出をタミーノに依頼することに。こうなれば誰でも、夜の女王が善玉で、ザラストロが悪玉だと思い込むのが当然。たしかに、夜の女王は美人だし、彼女が歌うアリアも美しいもの。ところが、悪玉だとばかり思っていたザラストロは、その姿を見ると決して暗黒卿というイメージではなく、わりと善良そうなおじさん……。これが『スターウォーズ』のダース・ベイダーのような風体であれば、即これは悪玉だと結びつくのだが、これでは誰が見ても「あれれ」と思うのは当然……? しかして、ザラストロに奪われたパミーナも、さらにパミーナを助けに行ったタミーノも、ひょっとしてザラストロは善人では、と考え始めたが……?

18世紀末の歌劇とは思えないそんなミステリー色の豊かさも、この歌劇の魅力の1つ。もっとも、第一幕と第二幕で、ザラストロと夜の女王の位置づけが大きく変わるのはこの歌劇の矛盾である、と言う人もいるらしいが……?

『魔笛』鑑賞の視点 その4——パパゲーノとパパゲーナ

はじめて『魔笛』を観る人が一瞬「あれれ」と思うのが、名前のよく似たパパゲーノとパパゲーナの登場……。兵士パパゲーノ（オリジナル版では鳥刺し）は本来タミーノの脇役として登場する人物だが、タミーノに協力してパミーナを助けようとしたら、沈黙の試練をタミーノと共に受けたりしている姿を見ると、その役割は相棒に近いもの……。もっとも、タミーノは沈黙の試練に打ち勝ったが、パパゲーノは残念ながら脱落したため、監獄にぶち込まれてしまうことに……。

脱落の1つの原因は酒や食い物だが、もう1つは老婆との会話。要するにパパゲーノは、タミーノよりもこらえ性がなかったということ……。ところが、モーツァルトの『魔笛』は、弱者に対してやさしいのが1つの特徴……。その表れの1つは、口をきいてくれないタミーノからすっかり嫌われてしまったと誤解したパミーナが、自殺しようとしたところを思いとどまる展開にしたこと。そしてそれと同じように、独り身のつらさを歌い、自殺しようとしたパパゲーノの前にも、なぜかあの老婆が若き日のパパゲーナ（シルヴィア・モイ）に変身して登場してくることに……。

そこで歌われるのが、『アマデウス』にも登場していたパパゲーノとパパゲーナが掛け合いで歌う『パパパの二重唱』。これによって、それまでのシリアスな展開が急にユーモラスな場面になること確実。そんな名場面をタップリと鑑賞したいもの……。

テーマは「光と闇の抗争」

『魔笛』のテーマは「光と闇の抗争」と言われているが、それは舞台を第一次世界大戦に置き換えたこのオペラ映画の方がオリジナル版以上に鮮明で、トルストイの『戦争と平和』に似た大テーマになっている。ちなみに、「光と闇の抗争」というテーマが最も明確にスクリーン上に表れるのはラストシーンで、今や形相もすっかり悪玉になり切ってしまった(?)夜の女王が、3人の従軍看護婦とモノスタスを引き連れて、ザラストロへの最後の反撃を加えようとするところ。映画なればこそその表現手法で光と闇の抗争の風景が明らかになるので、それもお見逃しのないように……。

フリーメイソンとモーツァルト

『アマデウス』でも、モーツァルトに対して『レクイエム』の作曲を依頼してくる

死神からの使いのような気味の悪い男が登場していたが、モーツァルトが謎の結社「フリーメイソン」の会員であったことはどうも事実らしい。プレスシートの『『魔笛』早わかりメモ』の中にも、「モーツァルトとシカネーダーがフリーメイソンの会員だったことから、タミーノが受ける試練の数々や作品全体を貫く教訓的メッセージ、さらには個々の和声や調性、楽器用法に至るまで、フリーメイソンの象徴が『魔笛』の中に周到に隠されている、というのが今日の定説となっている」と書かれている。

さらに、モノスタスはオリジナル版ではムーア人という設定だが、このオペラ映画では唯1人肌が黒い人間として登場している。これは、モーツァルトの『トルコ行進曲』（ピアノソナタ第11番の第3楽章）が有名なように、モーツァルトはトルコの異国性が物珍しく大好きだったため……？

それはそれでいいのだが、私がよくわからないのは、このモノスタスだけではずっと悪役として描かれていること。これではムーア人や肌の黒い人たちは浮かばれないのでは……？ ひょっとすると、こんな描き方もフリーメイソンの影響……？



オリジナルサウンドトラックを是非……

モーツァルトの『魔笛』の歌詞はもちろんドイツ語で書かれているから、リブレット（脚色、というよりも台本……？）担当のステイーヴン・フライは「ドイツ語の原本を英語に逐語訳したバージョンを下敷きにした」とのこと。そしてケネス・ブラナー監督たちスタッフは、「そこに映画の時代設定である1916年当時の話し言葉を注入した」とのこと。したがってこの映画では、スクリーン上の字幕を見ながら英語の歌詞を聴いていると、私程度の英語力でも理解できる部分が随所に……。さすがに日本語で歌われたのではかえって違和感があるが、あの堅苦しいドイツ語よりは英語の方が……？

また、プレスシートには『『魔笛』楽曲解説』があり、序曲から第21曲フィナーレまでのすべてについて、簡にして要を得た解説がある。この『魔笛』のオリジナルサウンドトラックは、6月27日に東芝EMIより発売されるとのことだから、早速購入し、新幹線の中で歌詞を見ながら聴かなければ……。これくらいの努力ですぐにモーツァルトの『魔笛』通になれるのなら、安いもの……？

2007(平成19)年5月30日記